

## 「国生み」神話と淡路の海人の習俗

坂江 渉

はじめに

小稿は、『古事記』と『日本書紀』（以下、それぞれを『記』と『紀』と略す。また記紀と並記する場合がある）にみえる「国生み」神話に焦点をしぼる。それに関する文献史的考察の到達点とその課題を示すとともに、関連史料を踏まえ、古代淡路の海人の信仰や祭祀・呪術の実態解明に迫ることを目的とする。

古代の地域社会研究において、神話や伝承を素材とする際、しばしば我田引水的な解釈になりやすい。とくに神話を用いる場合、その傾向が強く、厳密な方法視角の確立が必要となる。

小稿では、祭祀史料研究者や、かつての民俗学・

国文学者などの間で強調されてきた、祭儀神話論の立場で考察をすすめる<sup>1)</sup>。

これは、神話を虚構や机上の産物と見なすのではなく、祭祀儀礼と表裏の関係にあると理解する。具体的には、神話の目的は、現実の祭りの「諸事」の縁起を説くことにより、聞き手をして、その実修に向かわせる点にあるとみる方法である。

ここでいう諸事とは、祭りをめぐるモノ・コト・ヒトの三つに分類できる<sup>2)</sup>。それぞれの縁起譚によって神話全体が構成される。これは記紀などの宮廷神話や、現存する各国風土記の神話の分析でも、通用する見方であろう。ただし個々の神話の内容は、祭儀の何らかの縁起について、一対一で固定的に対応するのではなく、複数のものに掛かる場合がある点に留意すべきである。

小稿の方法をこのように示したうえで、右の課題の究明にアプローチしたい。

## 一、国生み神話をめぐる研究成果と課題

### (1) 国生み神話の概要

記紀の国生み神話は、それぞれの書の冒頭、「天地初発」と「天地開闢」の段の直後に登場する。史料全文を引用しないが、その概要を述べると、前半では、高天原の「天の浮橋」に立った男神の伊耶那岐命と、女神の伊耶那美命による「島造り」神話が、その主題になっている（以下、イザナギとイザナミと略す）。

それによると男女二神が、「天の沼矛」を下方（海原）に降ろして攪拌すると、「塩こをろこをろに画き鳴して、引き上げる時、その矛の末より垂り落ちる塩、累なり積もりて島」（『記』上巻。原漢文。以下も同じ）に成った。これが「淤能碁呂島」（オノコロ島）の誕生譚である。ついで二神はこの島に降り、「天の御柱」と「八尋殿」を立てる（『紀』はオノコロ島を「国中之柱」とし

たと記す）。そして柱の周りを巡り、互いに声を掛け合う、唱え言（遊び）をおこなう。女神が男神より先に唱えたことにより、不完全な子の「水蛭子」や「淡島」の誕生や、その葦船流しの話などが挿入される。

後半では、柱巡りの後、「ミトノマグワイ」（男女和合）の話が中心に据えられる。和合の結果、『記』では、「淡道之穂之狭別島」や「大倭豊秋津島」などの「大八島国」、「吉備児島」など六つの島、そして合わせて三五柱の神々が誕生する話が語られる。一方『紀』の本文（第四段）では、出産の際、「淡路洲」を胞衣として、やはり「大日本豊秋津洲」など「大八洲国」の国生みの話、山野河海の神々のほか、「天下之王者」たる天照大神、月夜見尊、素戔鳴尊の三貴神の神生みの物語が記されている（第五段）。

両書の間には、史料の細部でいくつかのズレや齟齬がみられる。また『紀』には、本文の異説を載せる「一書」が多数配されている。しかし記紀の国生み神話は、基本的には、「天の沼矛」の攪拌による「島造り」の話、および男女二神の生理

的な婚姻・出産による「国生み」と「神生み」の物語によって構成されているといえるであろう。<sup>③</sup>

## (2) 民間伝承性と天皇制神話の二側面

この神話に対する文献史上の到達点は、一九五〇年代から七〇年代に体系化された岡田精司氏の所説である。<sup>④</sup> 今日、その提起から相当の年月が経過している。しかしこれを乗り越える研究は、いまだ現れていない。氏の見解はさまざま論点を含んでいる。その最大の特徴は、国生み神話が、民間伝承的な側面と天皇制神話の二側面から成り立つと捉える点にある。

### ① 民間伝承的な要素

たとえば、前述の島造りの際の「塩こをろこをろに画き鳴して」の叙述や、柱巡りの時の男女二神の呼びかけの言葉、「あなにやし えをとこを」「あなにやし えをとめを」などは、本来、淡路の海人の共同体的な祭祀や呪術儀礼（歌垣など）の口頭伝承がもとになっていると説く。またイザナギとイザナミという神名は、それが瀬戸内海沿岸で顕著な海洋現象の「凧<sup>なぎ</sup>」、および「浪<sup>なみ</sup>」に由

来すると指摘する。さらにイザナギとイザナミは、神話のうえでは、大王家の守護神、天照大神の親神と位置づけられている。しかし現実の宮廷祭祀において、両神はそうした祭りの対象になっていない。むしろ『紀』の関連史料にもとづくと、もともとは島の崇り神として怖れられ、朝廷から鎮祭の対象になるような神格だったという。

岡田氏はこれらにもとづき、イザナギとイザナミは、本来、宮廷内の信仰と無縁のもので、淡路の海人の守護神であり、かつ地元の土地の創造神として崇敬されたと述べる。また矛の攪拌による島造りの神話も、島内の民間祭祀で語られていたもので、そのなかには、土地の創造だけではなく、島の住民の先祖の誕生譚も含まれていたと推測する。つまり淡路島では、こうした神話内容に反映される、イザナギらの神への海人の祭りがあったことになる。

岡田氏はこれが記紀に取り込まれた理由として、当地の海人や住民が、古くから大王の軍事的近侍・衛士・膳夫・湯坐などとして宮廷に出仕していたこと、また大嘗祭の「古詞」奏上の儀の諸国語部

のなかに、淡路の語部二人が含まれていたことを重視する。彼ら自身を通して、右の物語が王権内部に伝わったという。島造りの神話の伝達者を、淡路の島の住民や海人とみるのが岡田説の特徴の一つである。

## ② 天皇帝神話的な側面

だがこうして伝わった淡路の神話は、記紀においてそのまま筆録されなかった。氏によると、前述の女神の先の唱え言に端を発する、水蛭子と淡島の誕生や葦船流しの話は、儒教の夫唱婦随思想によって、書き改められたものだと説く。また神話中、もつとも大きな改変箇所は、男女二神の和合によって生まれたものが、人間の祖先ではなく、大王の支配領域としての「大八洲国（大八島国）」と描かれる点である。これは民衆の生活領域の郷土の枠組を遙かに超えた国土の形成譚である。岡田氏は、大八洲国の国生みの話が、「明神御大八洲日本根子天皇」という称号と不可分だと強調する。

結局、記紀の国生み神話は、淡路の島造り神話を原素材としつつも、最終的には、大八洲国の国

生みという天皇帝的な神話に組み替えられた。ここでは男女の和合という生殖行為と、それにもとづく国々の誕生の話を通じて、大王の国土支配を、呪術的、血縁系譜的に正統化しようとする意図を窺える。その一方で重視すべきは、この神話が、難波の浜でおこなわれる王位継承儀礼の一つ、八十島祭の縁起譚にもなっている点である。岡田氏によると、八十島祭は、日本の「国魂」としての大八洲の霊を、新しい大王が自らの身体に付着させ、それを通じて、国土の統治権の獲得をめざす祭儀だという。記紀の国生み神話は、この八十島祭の始まりの起源を語るものであった。

## (3) 岡田説と残された課題

以上が国生み神話に対する岡田説の概略である。筆者は一部を除き、これを継承する立場にたつ。岡田氏は、国生み神話のみならず、記紀に収められる個々の神話群の全体が、民間伝承性と政治的な天皇帝神話という、二つの矛盾した側面を持つと繰り返し喚起している。この指摘は、記紀神話を分析する際の重要な指標になるであろう。

このように理解したうえで、新たに深めるべき課題は、記紀の国生み神話の素材となった島造りの神話、すなわち土地の創造神話の方である。その背景には、どのような淡路の海人の信仰や祭祀儀礼があつたのであろうか。

岡田氏は、大八洲国の国生み神話と表裏の関係として、八十島祭があつたと述べている。しかし右の点については、ほとんど言及していない。そこで以下、関連する史料や民俗資料に依拠して、その究明に迫ってみたい。

## 二、淡路の海人の信仰と祭祀

### (1) 「オノコロ島」の誕生譚

島造りの神話において、淡路の海人の習俗を語るものとして、これまで注目されてきたのは、前述の「塩こをろこをろに画き鳴して」島が成るのくだりである。すなわちイザナギとイザナミが、天の浮橋から矛を降ろして攪拌すると、塩の滴りが「オノコロ島」になつたという箇所である。

### ① 製塩作業の反映説

早く前川明久氏は、これを淡路での「塩焼き」作業が発想源であると提起し、オノコロ島神話の原形は、「海人のたずさわっていた製塩過程が伝承化され、彼等の信仰したイザナギ・イザナミ神の信仰と結びついていた」と述べた。

また地元の研究、武田信一氏もこれを継承し、「土器の中で海水が沸騰する泡立ち、海人族らの活躍する鳴門海峡の渦潮であり、ふきこぼれを静める石の棒は、塩こをろこをろにかき鳴した沼<sup>ぬ</sup>矛<sup>ぼこ</sup>であり、土器の中でしだいに結晶塩がつもり重なるように増して、ついに土器いっぱい塩にできあがつたのは、これ、オノコロ島ではないか」と指摘した。現在この説は、多くの考古学者を含め、大方の支持を得ているようである。

しかし神話では、滴りが固まって出来たのは、あくまで「島」とされている。釜（土器）のなかではなく、海上での何らかの儀式が、神話の「原形」だとみるのが素直な読み方であろう。その中核に据えられる神事は、やはりイザナギとイザナミが最初におこなつたという矛の攪拌ではないか。

### ② 『播磨国風土記』のアメノヒボコ伝承

この点で想起されるのは、『播磨国風土記』の揖保郡粒丘条の天日槍命（以下、アメノヒボコと表記する）の伝承である。

アメノヒボコは、一般に但馬の出石に根拠地をおく、渡来人系集団が奉斎する神だと考えられている。しかし横田健一氏は、この神に関する記紀の神宝献上譚、神統譜や移住説話、さらには『播磨国風土記』の地元神との国占め争い伝承などを総合的に分析した。

その結果、氏はアメノヒボコを奉ずる但馬の一族が、日本海側の但馬から西播磨を経て、淡路にかけて南北に盤踞する海洋系の氏族だったと推測している。興味深い指摘である。

風土記の粒丘条の説話も、このアメノヒボコと、地元の葦原志挙乎命あしはらしこのおのみこととの間の、国占め争いの話の一つである。

天日槍命、（中略）。乞ひて曰く、「汝は国主くにぬしたり。吾が宿る所を得むと欲す」と。志挙しこ、即ち海中を許す。その時、客の神、劍を以て海水を攪きて宿る。主の神、即ち客の神の盛りなる行わざを畏れ、先に国を占めむと欲す。

これによるとアメノヒボコは、国主であるに葦原志挙乎命に宿る所を欲しいと願い出た。それに対して葦原志挙乎命は、海中での宿りを許した。するとアメノヒボコは、劍で海水を掻きまぜ、即座に宿る所を得た。それをみた葦原志挙乎命は、その神威と靈力の強さに畏れをなし、相手より先に国占めを試みたと伝えられている。

劍と矛の違いはあるが、ここでも武器で海水を攪拌させる行為が、話の中心をなしている。オノコロ島の誕生譚と、ほぼ同じモチーフの神話断片である。アメノヒボコを奉ずる海洋系氏族は、淡路の海人と密接に結びつき、それが宗教面にあらわれた可能性が高い（なお後述）。

彼らの間では、劍や矛などの武器が靈力を発揮する祭具として重んじられていたこと、またそれを海水で掻きまぜることにより、「宿る」ことも可能な、何らかのモノの形成を促すと信じる海洋祭祀があったことを窺わす。

とすれば、アメノヒボコが劍の靈力で得たという「宿る所」は何をさすか。風土記には、「志挙、即ち海中を許す」と書かれる。これにより、従来

それは、文字通り、海の中や海底と捉えられてきた。しかし各国風土記や『紀』などには、「海中」が必ずしも海の中ではなく、海上をさす用例がみられる。

たとえば『播磨国風土記』の印南郡条には、「郡の南の海中に小島あり。名を南毗都麻と曰ふ」とあり、『肥前国風土記』松浦郡值嘉郷条では、「昔、同じき天皇（＝景行天皇）、巡幸の時、志式島の行宮に在りて、西の海を御覧す。海中に島あり。烟氣多に覆ふ」とみえる。また『紀』の神功皇后摂政元年二月条には、「皇后の船、直に難波を指す。時に皇后の船、海中にて廻りて、進むこと能はず」という叙述が登場する。

### ③ 剣の攪拌と砂州

これにもとづくアメノヒボコが、剣の攪拌の靈力で宿った所は、海中ではなく、海上に現れるもの、すなわち「島」が想定されていると考えられる。しかもそれは、島嶼や岩礁のようなものではない。今まで無かったものが、剣の攪拌の靈力で急に出現したという神話の中身からみて、それは沿岸部の干潟やラグーンにおいて、時には姿を

隠し、時には姿を現す砂州状の島ではなかったか。というのも播磨灘の沿岸部は、現在も潮干狩りの名所があるように、干潟や砂州群が多い地形環境だからである。

もちろん砂州や砂嘴など砂の造形物は、剣などの攪拌、さらには潮水の凝固によって出来るものではない。河川と沿岸部の漂砂と、潮の満ち干という自然現象によって形成される、砂の堆積構造物である。しかし古代の人びとは、一日ごとに形を変え、浮き沈みを繰り返す砂州状の島々を、神や精霊が「宿る」神秘的な場所とみた。

『延喜式』巻九の神名帳には、安房国安房郡の「后神あめのひり天比理とめ刀咩命神社」（大社）の元の名として「洲神すのかみ」と書かれている。当時、「海の砂州に宿る神」の考え方があったことを示唆する。砂州は多くの場合、生命力に満ち溢れるものとして崇敬対象になっていた。当時、砂州状の島々が、「生島いくしま」や「足島たるしま」と呼ばれたのもそのためである。

### ④ 矛の攪拌の神事

これを踏まえて淡路の島造りの神話に戻ってみると、海上での矛の攪拌によって得られたという

オノコロ島は、島内の干潟やラグーンにおいて、見え隠れする砂州状の島をさした。現在の淡路島の地形環境からみて、かつての干潟の候補地として、野島・郡家・志筑・洲本・慶野松原付近などを挙げられる。このうち慶野松原の砂堆さたいは、弥生時代に埋納された銅鐸（松帆銅鐸）が出土したことで有名である。

つまり淡路の海人、さらにいうと西播磨への進出をはかっていたアミノヒボコを奉ずる海洋系氏族らにとって、矛や剣などの武具は、前述の通り、攪拌することを通じて、一定の靈力を發揮する祭具であった。それを満ち潮の時、海水に入れて掻き回す行為は、多くの砂州状の島々の形成を促し、さらにそれが陸地化し、やがては自分たちの故郷の土地（島）の創造につながると信じる祭儀が存在した。

おそらく淡路の海人たちは、大潮の日の満潮時、小舟などを干潟に繰り出す。船上から矛を海水に入れて、それを攪拌する所作の神事をおこなっていたのであろう。

記紀のイザナギとイザナミによるオノコロ島の

誕生譚は、この神事の存在を踏まえており、もともと地元では、その縁起を明かすために語られていた。その前提には、矛などの武具の靈力を信じる習俗と、砂州に対する信仰があつた。

## （2）ハシタテの伝承

以上がオノコロ島の誕生譚から読み取れる淡路の海人の祭儀のあり方である。しかし記紀の島造り神話に眼をやると、矛による海水の攪拌の話のほか、もう一つ重要なモチーフを見出せる。それが、橋や柱などの「ハシ」を垂直方向に降ろしたり、島の上に立てたりする、いわゆるハシタテの伝承である。たとえばイザナギとイザナミは、天の浮橋に立って、矛を下方に降ろし、その後、オノコロ島で、天の御柱を立てたという。

このうち両神が「立った」という天の浮橋の「橋」は、橋梁のハシではなく、梯子のハシをさするとみられる。ハシタテの伝承は、従来の研究で、本格的に取り上げられて来なかった。

### ①神の依り代としてのハシ

古代の橋・梯・椅・箸・嘴・梁・柱などの字は、



すべて「端」(細長い末)をもつ棒状のもの、串状のもの、という点で共通する。和語ではいずれも「ハシ」とも読まれ、互いに通用する字として使われた。右で「梯」が「橋」と書かれたのも、その事例の一つである。

そうしたハシを垂直方向に立てる行為は、当時の信仰の世界で、さまざまな役割を担わされていた。まず一つ想起されるのは、現在でも信州諏訪神社の御柱祭りの民俗事例がよく知られるように、神の依り代の設営の意味である。これについて民俗学者の柳田國男は、祭祀の時、柱・梯・箸などのハシを立てることは、信仰上、祭場の標示、神の依り代、神の去来のための通路を設けることを示すと述べた。

また「ハシタテノ」の枕詞の問題を分析した国文学者の井手至氏も、ほぼ同様の見方を示す。それとともに氏は、ハシタテの素朴な姿が、樹枝状のものを立てることであり、またそれに加え、串立・杖立・矢立・立て砂なども、祭祀の際の依り代と、境界標示の役割を果たすと述べている。

古代の史料でも、『出雲国風土記』神門郡高岸

郷条に、つぎのような伝承がある。

高岸郷。郡家の東北の二里にあり。天の下を造る所の大神の御子、阿遲須積高日子の命、甚だ昼も夜も哭き坐す。仍りてその処に高屋を造り坐せき。即ち高椅を建てて、登り降らせて養ひたし奉る。故に高崖と云ふ。(神龜三年に字を高岸に改む)。

昼も夜も哭き止まないアジスキタカヒコの神をあやすため、郷内に「高屋」を築き、そこに鎮座させた。それと同時に、高いハシゴたかほし。「高椅」を建て、そこで神を登り降りさせてなだめた。だから高岸郷と呼ぶと書かれている。ここでも高床の建物に立て掛けられたハシが、神の依り代、鎮座地と下界とを往来する通路の役割を与えられている。

これらの事例をみると、イザナギとイザナミがオノコロ島に降り、そこに天の御柱を立てたという神話は、矛の攪拌後に現れたいくつかの砂州の上で、「柱」を立てる神事があったことを示す。それは祭神のイザナギとイザナミの霊を招くことを意味し、神話はその行事の起源譚になっている。

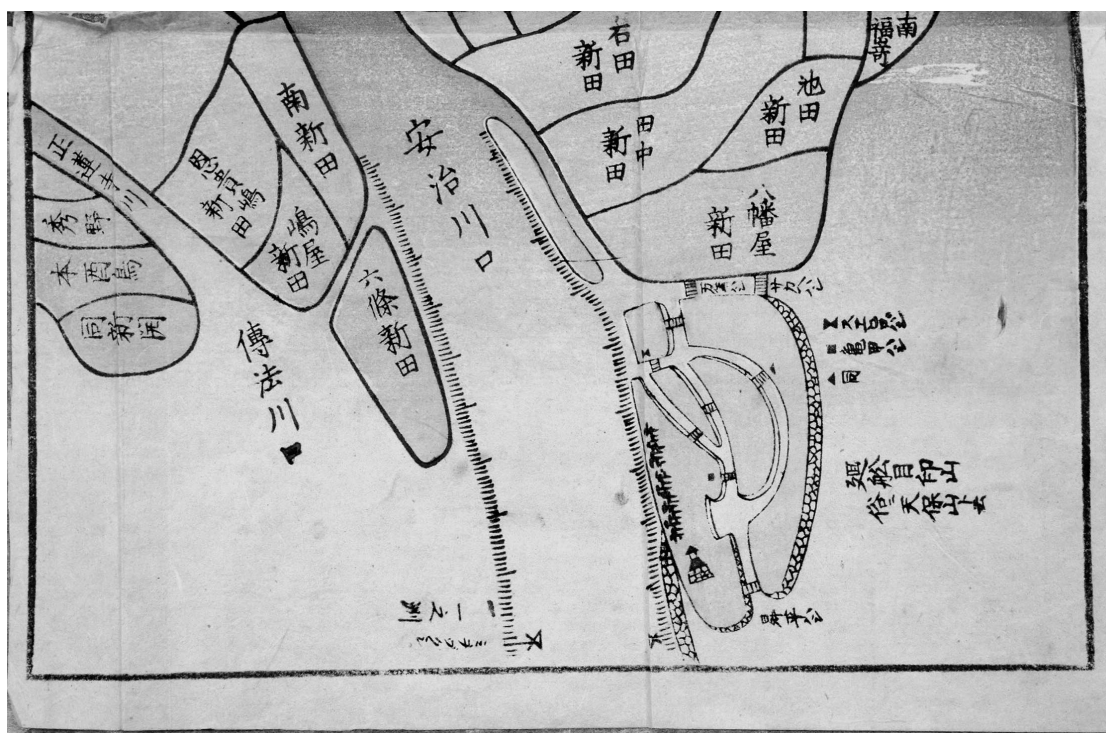
## ② 濡標の習俗

砂州や浅瀬にハシを立てる習俗は、今でこそほとんどみられない。しかし古代には、各地で「濡標」を立てる慣行があった。『万葉集』（巻一四—三四二九）や『延喜式』（巻五〇、雜式）などによると、濡標は汽水域の湖（浜名湖など）の細い入り江や、難波津の川尻の干潟などに常時立てられていた。これはそうした水域を通る舟に対して、浅瀬に木や竹の棒を立て、航路（水脈）を教えるための、実用的な標識（串）の一つである。

しかしそれは一方で宗教的な意味合いも含み、この「串」に神を招き、そのもとで舟の安全通航を期する目的もあつたのではないか。ハシタテの神事は、この習俗にもつながるのであろう。

## ③ 砂州上のハシタテの神事と呪術

これらを踏まえて祭儀の具休像を復元すると、おそらく大潮の日、淡路島内の干潟やラグーンでは、矛の攪拌行事の後、引き潮によって現れた砂州状の島々の上に、ハシ（柱）が立てられた。この神事をつかさどつたのは、海人を統率する地位にある地元族長であつた。



▲『弘化改正 撰津大阪全図』にみえる一之洲・柵列・濡標（大阪城天守閣蔵）

なぜなら古代のある土地で、ハシやクシ、さらには杖などを刺し立てる行為は、神の依り代の意



▲砂州上の潮干狩り(たつの市新舞子海水浴場)

味のほか、それを立てる主体による土地占有(国占め)もあらわしたからである。<sup>12)</sup>淡路の海人の祭りには、共同体的な民衆行事だけに尽きるものではなく、政治的な要素も含まれていた。

こうしてハシ(柱)が立った砂州上には、海人の一族の老若男女がすべて集まった。あたかも現在の潮干狩りのような光景である。そこでまずハシに対し、祭神であるイザナギとイザナミの来臨を仰ぐ神事がおこなわれた。これを主宰したのも

族長層であり、ハシのもとで、海人の航海の安全や豊漁の祈り、神への感謝の意を捧げる厳粛な神事(供饌<sup>ぐせん</sup>など)が実施された。さらにその後、神と人の共同飲食(酒

食)の宴が始まると、場の雰囲気<sup>13)</sup>が和みだす。すると男女間の性の解放行事である歌垣も、ハシやその近くの松林などでおこなわれたのであろう。

このようにイザナギとイザナミによる矛の攪拌の神話、オノコ口島で天の御柱を立てる話、それを巡って声を掛け合う説話など、個々の神話の内容は、砂州における海人の祭りと呪術と表裏の関係にあった。それらは、祭りの「コト」(矛の攪拌やハシタテの神事など)の開始由来のみならず、その際使われる「モノ」(矛・柱などの祭具)や、特定の「ヒト」(族長層)が祭りをつかさどることとの縁起譚にもなっていた。

以上をまとめると、記紀の島造りの神話から読み取れる祭祀儀礼は、少なくともつぎの三つから成り立つ。第一に、大潮の日の満潮時などに、矛を用いて海水を攪拌することにより、砂州状の島の形成を促す行事、第二に、砂州に立てたハシ(柱)に憑依した祭神、すなわちイザナギとイザナミへの祈りと感謝の意を捧げる神事、第三に、ハシやその周辺での歌垣の「神遊び」(呪術)である。

### 三、イザナギ・イザナミ信仰と神話の広がり

本章では、イザナギ・イザナミ信仰の各地への広がり、その受容のされ方の地域的特質について考えてみたい。

#### (1) イザナギ・イザナミ信仰の広がり

古代の淡路は、島の北半（津名郡）と南半（三原郡）に大きく分かれ、イザナギとイザナミをまつる式内社、淡路伊佐奈伎神社（名神大社）は、北半の津名郡にあった。

しかし記紀、『万葉集』、木簡資料などによると、海・海部・安曇連氏など、海人系氏族は両郡に亘って分布していた。<sup>13</sup> 当社はこの双方の海人の信仰拠点になっていたと思われる。

そうした彼らは、単に製塩や漁撈作業のみに従事する民ではなかった。記紀では、応神天皇妃を吉備に送り届けたという「淡路の御原の海人八十人」の伝承（『紀』応神天皇三十二年三月丁酉条）、「淡路の海人八十人」が朝鮮半島へ水手として派遣されたとの話（同、仁徳天皇即位前紀）、ある

いは阿曇連浜子に率いられ、住吉仲皇子の謀反に加担したという「淡路の野島の海人」の説話（同、履中天皇即位前紀）などがみられる。これにしたがうと淡路の海人の本質は、王権の航海・水軍の担い手として、すぐれた舟運力と機動性に富んだ集団と捉えられる。

こうしたあり方に起因して、イザナギ・イザナミの民間信仰も、島内だけに留まらず、各地に一定の広がりをみせている。表A（次頁参照）にあるように、延喜式内社ついて、淡路以外の国で、イザナギとイザナミの神名を帯びる神社は七例に及び、「アワジ」を名乗る神社が二例みられる。

これをみると両神をめぐる民間信仰は、淡路を起点にしつつ、畿内中枢部や瀬戸内海の沿岸地域のほか、西日本を中心とする日本海側（若狭国大飯郡）、南海道の内陸部（阿波国美馬郡）にまで広がっていたことが分かる。とくに日本海側と四国方面という、南北方向への展開を見いだせる点が注目される。

しかし信仰の広がりといっても、淡路の海人の祭儀と呪術とが、各地でいつ、どのように取り入

①	大和国添下郡	伊射奈岐神社	大、月次、新嘗。
②	葛下郡	伊射奈岐神社	
③	城上郡	伊射奈岐神社	
④	摂津国島下郡	伊射奈岐神社二座	並大、月次、新嘗。
⑤	伊勢国度会郡	伊佐奈岐宮二座	伊佐奈弥命一座。並大、月次、新嘗。
⑥	若狭国大飯郡	伊射奈伎神社	
⑦	淡路国津名郡	淡路伊佐奈伎神社	名神、大。
⑧	阿波国美馬郡	伊射奈美神社	
⑨	和泉国和泉郡	淡路神社	
⑩	播磨国揖保郡	阿波遅神社	
⑪	丹後国与謝郡	天椅立、久志浜	イザナギのハシをめぐる伝承（風土記逸文・速石里条）
⑫	播磨国揖保郡	宇頭川底	天日槍は剣を攪拌し海中に宿ったという（風土記・粒丘条）
⑬	出雲と伯耆堺	比婆之山	神避れる伊耶那美神の葬送地と伝える（古事記）
⑭	出雲国意宇郡	出雲神戸	熊野加武呂乃命はイザナギの真子と伝える（風土記）
⑮	島根郡	千酌駅家	イザナギの御子、都久豆美命がいると伝える（〃）
⑯	神門郡	古志郷	イザナギの時、池を築造したという（〃）
⑰	紀伊国	熊野之有馬村	神退去れる伊弉冉尊の葬送地（日本書紀、神代卷・5-5一書）

▲表A-イザナギ・イザナミ信仰に関わる式内社と伝承地

（※『延喜式』巻8、祝詞29・出雲国造神賀詞条にも、熊野大神はイザナギの「日真名子」とみえる）

れられ、またその前提に、如何なる交通関係の進展があったかを探ることは相当難しい。式内社に関する情報だけで、そのすべてを見渡すことは不可能である。またそれぞれの土地の地形環境に眼を向けることも重要になってくる。

ただし表Aのうち、少なくとも大和の三社（①②③）などは、前述の大王の軍事的近侍・膳夫などとして奉仕した、淡路の海人自身の移住に伴う勧請の可能性が高い。また和泉と播磨のケース（表A-⑨⑩）は、「アワジ」という国名を称することからみて、これも淡路から海人の移住や進出にもとづくと考えられる。

## （2）海人系集団による地域間交流

そういう状況のなか、わずかに手がかりを提供するものは、式内社の鎮座地と比較的近い地域にみえる、イザナギ・イザナミやその祭具をめぐる神話と伝承である。

いずれも断片的なものばかりだが、その一つは、先に触れた『播磨国風土記』のアメノヒボコの伝承である（表A-⑫）。剣で海水を掻きまぜるこ

とにより「宿る所」、すなわち砂州を得たという話は、前述のように、淡路の祭祀儀礼の一部と、それにもとづく土地創造の神話が、アメノヒボコを奉斎する但馬の海人系氏族へ伝わったことをあらわす。

これに関連して、五、六世紀の地域間交流の解明を政治史の立場から試みた古市晃氏は、ある時期、但馬のアメノヒボコと淡路の海人勢力は、強く結びつき始めたと説く。氏によると、両者を結びつけたのは、五世紀代の倭王権を代表する葛城氏だったという。<sup>(註)</sup>興味深い提起である。

葛城氏の問題はしばらく措くとして、海人系集団による地域間交流の形成は、多かれ少なかれ倭王権の関与があったとみるのが妥当であろう。だからこそ淡路の民間祭儀と神話の一部が、日本海側に拠点をおく海人系氏族にも伝わったとみられる。

### (3) 丹後の海人とハシタテの伝承

#### ① 『丹後国風土記』逸文

このような日本海側の海人への信仰の広がり

ついて、もう一つ注目されるのは、表A―⑪、丹後の与謝郡の「天<sup>あまのはしたて</sup>橋立」と「久<sup>くし</sup>志浜」をめぐる神話である。

与謝郡内には、イザナギ・イザナミの名を帯びる式内社はないが、海部直<sup>なほ</sup>氏を祭主(祝部<sup>はかり</sup>)とする籠<sup>この</sup>神社(名神大社)があった。おそらく籠神社の祭祀の時、海部直氏が語ったとみられる神話の一部が、つぎの『丹後国風土記』逸文(『釈日本紀』巻五)である。

丹後国風土記に曰く、与謝郡の郡家の東北の隅<sup>はし</sup>の方に速石<sup>はやしのさと</sup>里あり。この里の海に、長大なる前<sup>さき</sup>あり。(中略)。先に天橋立と名づけ、後に久志浜と名づく。然云ふは、国生<sup>くに</sup>みの大神、伊射奈芸命、天に通<sup>とほ</sup>ひ行かむが為に、椅<sup>はし</sup>を作り立てる。故に天橋立と云ふ。神が御寝<sup>みね</sup>坐す間に仆<sup>たふ</sup>れ伏しぬ。仍りて久志備に坐<sup>ま</sup>すことを恠<sup>なげ</sup>む。故に久志備浜と云ふ。此を中<sup>なかつ</sup>つ間に、久志と云ふ。(後略)。

この史料では、籠神社の眼前で、南側の海へ突き出す巨大な砂嘴(前<sup>さき</sup>||現在の天橋立)、当時の名称でいうと久志浜(=串状の浜)と天橋立の形

成譚、およびその地名起源説話が記されている。淡路のような砂州ではないものの、砂嘴など浜辺の土地の創造神話が含まれている。

## ②画期としての継体朝

その創造主の神は誰か。イザナミの名はみえないが、「伊射奈芸命」がその主体として登場している。これは先にみたアメノヒボコを主人公にする風土記の伝承と大きく異なる点である。現在の籠神社の祭神は「火明命」だが、この当時は、イザナギが祭神だったと思われる。

自分たちの守護神で、かつ土地の創造主でもある神を、わざわざ淡路固有の神、イザナギとする以上、海部直氏は、淡路の海人から相当強い影響を受けていたことを示す。両者のつながりの時期は、五世紀代ではなく、継体朝以降の六世紀代であろう。

というのも同氏の系図によると、海部直氏の始祖は、前述の「火明命」とされているからである。<sup>(15)</sup>最近の研究成果によると、火明命の末裔を名乗る氏族の多くは、継体天皇の即位を契機にして、同じく火明命を祖にいただく尾張連氏につながって、

西日本各地に根を張り出したと考えられている。<sup>(16)</sup>海部直氏もこの動きに呼応して、丹後の与謝郡に拠地を築いた。淡路の海人との結びつきも、この状況のなかで作られたと想定される。

つまり両者の結合を事実上媒介したのは、継体系の倭王権とそれを取り巻く氏族集団であり、王権はこれを通じて、海人のネットワークの再編・拡充をはかったといえる。

## ③ハシをめぐる伝承

これらの点を確認したうえで、神話の中身に眼をやると、まずイザナギが、天との間を往来するため、ハシ（梯子）を作り立てた。だからそこを「天橋立」と呼ぶという。ところがイザナギが寝ている間、ハシが倒れた。神は「久志備」（不思議）に思い、これを「久志備浜」と名づけた。後の世に「久志浜」と称したとみえる。

矛盾の攪拌の神話は登場せず、ハシをめぐる話が主題になっている。そのわけはこの地域の地形環境に規制されている。この付近の海は、淡路のような砂州の島々ではなく、巨大な串状の砂嘴が顕著に目立つところである。それは圧倒的な光景で、

かつ神秘的なものであった。したがって矛の攪拌ではなく、その形状に相応しいハシタテの伝承が受け入れられた。ただしそのハシは一旦作り立てられたものの、神が寝ている間に倒れてしまった。それにより砂嘴が形成されたと伝えられている。やや滑稽さを含んだ話の展開になっている。

一方ハシを立てる伝承そのものをどうみれば良いか。イザナギはハシを「作り立てた」と書かれ、またそれは「天橋立」の地名起源説話になっている。だからこの伝承も、土地の創造神話の一つとみる必要がある。これに関連して柳田國男は、『地名の研究』のなかで、ハシタテの地名を取り上げ、つぎのように述べている。

ハシダテといえは、梯はしを立てたような嶮しき岩山をいうのが常のことで、その梯が倒れて後にこれを橋立おおいそぎというのは不自然なるのみならず、『風土記』に大石前とあるのが今と合わぬ。これはむしろ湾の外側の岩山のことであつたのを、名称と口碑とがいつか湾内の砂嘴に移つて来たものと見られる。現在の橋立の名前としては、今では山上の寺となつてい

る成相なりあいの方が当たつている<sup>(17)</sup>。

柳田によれば、「天橋立」は現在の天橋立ではなく、籠神社の背後の嶮しい山、成相山（＝西国巡礼札所の成相寺の所在地）の岩場付近の地名であつた。その由来は、ここに岩山があることに因むという。つまり柳田は、岩山が「天橋立」に見立てられたと説いている。首肯される見解であろう。おそらくその当時、山腹の岩脈や岩肌などが、山の麓からよく見えたのではなからうか。

すなわち丹後のハシタテの伝承は、二つの土地の創造神話が組み合わせられていた。その一つは、イザナギが天橋立という成相山の岩場を創造する話、もう一つは、それが倒れて久志浜が形成される話である。

#### ④ハシを立てる神事と倒す神事

とすれば、これらの神話を通じて、その縁起が語られる、当地の海人の祭儀も、少なくとも二つの神事から成り立っていたことになる。

一つは、ハシを成相山の岩場の麓に立て、それにより祭神のイザナギを、鎮座地から祭場に呼び寄せるための神事である。神話ではイザナギの鎮



座地は「天」にあるように記されている。しかし柳田が示唆するように、成相山の岩場が、登り降りのためのハシになぞらえていた。したがってその鎮座地は天ではなく、岩場がある成合山の山上とみるのが妥当である。当地のハシタテの神事は、いわば山岳祭祀という側面をもっていた。

これに引き続き神話では、そのハシが倒れて、今度は久志浜（砂嘴）が出来たという。したがって実際の祭祀では、一旦立てたハシを、その後しばらくして、海の方に倒す神事も伴っていたのであろう。諏訪神社の御柱祭りでも、前回立てられた柱を倒す神事、「御柱休め」がある。丹後でのこの儀式は、山上から招霊したイザナギを、さらに砂嘴の上に遷し、海との間を行き来させる意味があったと推測される。

#### ⑤ 海洋信仰と山への信仰

こうしてみると丹後の海部直の一族は、海に突き出す巨大な砂嘴への海洋信仰とともに、成相山に対する信仰を、その基盤にもっていたことになる。海人が全員集まっておこなわれる祭りの場合は、山と砂嘴、さらにいうと山と海との間を結ぶ接点

の役割を果たしていたわけである。このような信仰にもとづく、一連の神事の縁起、および天椅立と久志浜の創造とその地名由来を示すのが、『丹後国風土記』逸文の神話であった。

この丹後の神話から窺える山に対する信仰について、淡路の海人の神話では、直接これを見いだせない。しかし古代における山や丘陵は、海に生きる海人にとって、生活上欠かせない飲料水などの水源地であり、また森林資源、とくに船材（舟木）の供給地でもあった。淡路の海人においても、あるいはこれと同様の信仰と、それにもとづく神話があったかも知れない。実際、淡路の野島浦の比定地の東側の山稜には、「舟木」という地名が残っている。

これに関連して、丹後とは正反対に位置する、南海道の阿波の内陸部の美馬郡にも、伊射奈美神社（表A―⑧）とともに、天椅立神社という式内社があった（『延喜式』巻一〇）。美馬郡は吉野川上流域の山間の地である。ここでも山に対する信仰を基盤にする、ハシタテの神事と、それもとづく土地創造神話が存在した可能性がある。

とくに天椅立神社の当初の鎮座地は、中世以降に栄えた山上寺院、「箸蔵寺」<sup>はしくらじ</sup>付近であったとみられる。椅と箸は通用される字だからである。しかし今のところ、これ以上、詳細なことは分からない。

今後、古代の海人のあり方を探る場合、海への信仰とともに、山に対する信仰についても、眼を向ける必要があるだろう。

おわりに

以上、記紀の国生み神話をめぐる研究の到達点である、岡田精司説を出発点にして、淡路の海人の祭祀儀礼の実態解明と、その信仰の地域的広がりについて考えてきた。

その結果、古代の淡路では、少なくとも、①大潮などの祭りの日、矛で海水を攪拌することにより、砂州状の島の形成、ひいては自分たちの土地の創造を促そうとする行事、②砂州上にハシを立て、そこに憑依したイザナギとイザナミに祈りと感謝の意を捧げる神事、③ハシの周辺で若い男女

が歌を掛け合う性的解放の呪術儀礼（歌垣）、という三つの祭儀があることを指摘した。またこのうち①②では、地元族長層による地域支配を、可視的に標示・確認するねらいも含まれていた。

また『丹後国風土記』逸文からは、与謝郡の海部直の一族にも、イザナギを祭神とするハシタテの神事が取り込まれ、自分たちの土地の創造神話が語られていたこと、ただしここでは海への信仰とともに、山への信仰があつたことを読み取れた。

淡路の古代地域社会研究は、淡路島日本遺産委員会の協力を得て、ようやく緒についたばかりである。今後、中世・近代の史、資料も駆使しつつ、山や巨岩（磐座）への信仰、山林資源の獲得や他地域との交通の問題に留意しつつ、基礎的な研究をすすめていきたいと考える。

(1) 松村武雄『儀礼及び神話の研究』（ゆまに書房、二〇〇五年。初出は一九四八年）、柳田國男『口承文芸史考』（ちくま文庫版全集八。初出は一九四七年）、土橋寛『古代歌謡の世界』（塙書房、一九六八年）、岡田精司「記紀神話の成立」（『岩波講座日本歴史』二、一九七五年）、松前健「祭祀と神話」（『松前健

著作集』五、おうふう、一九九八年。初出は一九七九年)など。

(2) 拙稿「『播磨国風土記』の神話からみる祭りの諸事の縁起譚」(専修大学社会知性開発センター編『古代東ユーラシア研究センター年報』三、二〇一七年)。

(3) 作品論立場からみると、これに続くイザナミの死の話(黄泉国訪問譚)禊祓説話までを扱うべきかも知れない。しかしそれらは宮廷内の別系統の祭儀と結びついており、考察の対象外とした。

(4) 岡田「国生み神話について」(『古代王権の祭祀と神話』塙書房、一九七〇年。初出は一九五六年)。

(5) 八十島祭の祭場の捉え方について違和感を感じる。山根徳太郎氏が説くように(「みそぎ」ナニワにおける皇室の儀禮)『国史論集』一、讀史會、一九五九年)、難波瀉の砂州の一つが選ばれて執行されたと考える。

(6) 前川「国生み神話にみえる塩」(『日本史研究』一〇一、一九六八年)、三三二頁。

(7) 岡本稔・武田信一『淡路の神話と海人族』(Books成錦堂、一九八七年)、五五頁。

(8) 横田「天之日矛伝説の一考察——神宝関係記事を中心として——」(『日本古代神話と氏族伝承』塙書房、一九八二年。初出は一九六二年)。

(9) 拙稿「播磨の天の橋立」(坂江編『風土記からみる古代の播磨』神戸新聞総合出版センター、二〇〇七年)。

(10) 柳田『日本の祭り』(ちくま文庫版全集一三。初出は一九四二年)。

(11) 井手「垂仁紀「はしたて」の諺と石上神庫説話——枕詞「はしたての」の「はしたて」の習俗をめぐって——」(『遊文録 説話民俗篇』和泉書院、二〇〇四年。初出は一九六〇年)。

(12) 拙稿「「国占め」神話の歴史的前提——古代の食膳と勸農儀礼——」(『日本古代国家の農民規範と地域社会』思文閣出版、二〇一六年。初出は二〇一三年)。

(13) 本誌第二号(二〇一七年)所収の古市晃論文「国家形成期における淡路の位置」に詳しい。

(14) 古市「記紀・風土記にみる交通」(館野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報』二、吉川弘文館、二〇一六年)。

(15) 『海部氏系図』(金久与市『古代海部氏の系図(新版)』学生社、一九九九年)。

(16) 中林隆之「石作氏の配置とその前提」(『日本歴史』七五一、二〇一〇年)。

(17) 柳田『地名の研究』(ちくま文庫版全集二〇。初出は一九三六年)、二五八頁。